

今年も12月8日が近づいてきた。終戦から75年が過ぎて、日本人の多くがこの日を忘れ始めていると報道されるようになってきた。私は終戦間際の昭和19(1944)年生まれだから、もちろん何も知らない。ましてや太平洋戦争が始まったのは昭和16(1941)年12月8日だから、なおさらである。

先日、GOTO
トラベル事業の恩
恵にあずかって、

友人たちと東信の寺巡りの旅をしてきた。北向観音堂、安樂寺、大法寺などを回って、新型コロナウイルス感染症の終息を願って手を合わせてきた。ちょうど紅葉が真っ盛りで天気にも恵まれ、2日間いい旅ができた。

今回の旅はもう一つの目的があった。それは無言館の見学である。すで行ったことがある友人もいた

無言の絵画

が、あらためて時間をとってじっくり見学した。無言館は、第2次世界大戦で没した画学生の慰霊を目的に、平成9(1997)年に著作家の窪島誠一郎さんが建てた美術館で、全国を回って遺族を訪問し、遺作を集めて展示している。

作品一つ一つを見ていくと、多くが20代

の青年たちであり、独身者や妻子ある人、出身も経歴もさまざまである。

る。彼らは赤紙一枚で、あるいは学徒動員で戦地へ向かい、夢かなわずして亡くなった未来ある若者たちであった。もしあの戦争がなかったら、日本あるいは世界で活躍し、美術界で名を残す人もいたかもしれない。館を出るとき、無言の絵画と彼らにそっと手を合わせてきた。

(安曇野市穂高、荻原義重、76歳)

口 差 点

こうさてん